

ゆれる

2007(平成19)年2月5日鑑賞(リサイタルホール)

★★★★



監督・脚本・原案＝西川美和／出演＝オダギリジョー／香川照之／伊武雅刀／新井浩文／真木よう子／蟹江敬三／木村祐一／田口トモロヲ／ピエール瀧（シネカノン配給／2006年日本映画／119分）

第2章

面白くてためになる

……見逃していた「2007朝日ベストテン映画祭」第1位の名作を遂に鑑賞し、大いに感動。前日に観た台湾の蔡明亮監督ツァイ・ミンリャンの『西瓜』『楽日』に感激していたが、こんな名作を観れば日本映画のレベルに自信を持つことも……。また、キネマ旬報ベスト・テンで助演男優賞と脚本賞を受賞した香川照之と西川美和にも拍手を送りたい。この映画後半の法廷シーンについての私の評論はベテラン弁護士ならではのものと自負しているから、他の評論にはない私の視点をじっくりと味わってもらいたいもの……。授賞式で、今年1年はシナリオづくりに集中したいと話していた西川美和監督の次回作は医者をも主人公としたものらしいが、大いにそれに注目したいものだ。

やっと観た、朝日ベストテンの第1位！

『ゆれる』は2006年7月8日に公開され、大評判を呼んだ作品。ちなみに、『ゆれる』は2006年5月の第59回カンヌ国際映画祭で上映された日本で唯一の長編作品。昨年は、どの映画祭でも1、2位を争った邦画は『ゆれる』と『フラガール』の2本。それに『紙屋悦子の青春』や『雪に願うこと』が絡むというのが大体のパターンだった。

そんな名作を私はたまたま見逃していたわけだが、今日「2007朝日ベストテン映画祭」でやっと観ることができた。ちなみに、『キネマ旬報』2006年7月上旬号の巻頭特集「兄弟という不条理『ゆれる』」における対談の最初に、香川照之が「『ゆれる』、キネ旬1位になるといいなあ」と発言しているが、昨日読んだ

『キネマ旬報』2月下旬決算特別号によると、「2006年 第80回キネマ旬報ベスト・テン」の日本映画ベスト・テンの第1位は『フラガール』となり、『ゆれる』は惜しくも第2位となっていた。もっとも、香川照之が助演男優賞を、西川美和が脚本賞を受賞しているから準三冠(?)ともいえる立派なもの。さあ、昨日の心いっぱいの感動を胸に、以下坂和流評論を展開していこう。

内容的にはシネカノンの1人勝ちだが……

今日2月5日、7時からの『ゆれる』の上映は、授賞式を兼ねたものとなり、①『ゆれる』の西川美和監督、②外国映画第1位となった『グエムル 漢江の怪物』のポン・ジュノ監督、そして③特別賞を受賞した李相日監督が登場し、受賞のあいさつと対談がなされた。「シネカノン」は李相日が創設した配給会社兼製作会社だが、キネマ旬報ベストテン2位の『ゆれる』はこのシネカノンの配給作品であるうえ、1位の『フラガール』は李相日が監督し、シネカノンが製作・配給したもの。昨年の興行収入においては、フジテレビと連携した『LIMIT OF LOVE 海猿』(71億円)や『THE 有頂天ホテル』(61億円)が大ヒットしたが、これらが心に残る感動作かどうかになるとかなり疑問で、内容的には『ゆれる』や『フラガール』の方が圧倒的に上……。その意味で、昨年は興行収入はともかく、内容的にはシネカノンの1人勝ちともいえる状況となった。そんないい作品を今後も一層広めていくためには、商売だけではない工夫と努力が必要。21年ぶりに邦画が総興行収入の53%と洋画を上回り、「邦高洋低」となった邦画絶好調の今こそ、それに浮かれることなく、李相日監督がさかんに強調していたように、いい映画づくりの努力を重ねていかなければ……。

『エデンの東』 vs. 『ゆれる』

父親の愛への渴望と兄弟間の確執を描いた名作は、ジェームズ・ディーンの瑞々しい演技が心に残るジョン・スタインバック原作、エリア・カザン監督の『エデンの東』(55年)。これは言うまでもなく、旧約聖書にある兄カインと弟アベルとの争い(兄による弟殺し)の物語をアメリカバージョンでアレンジしたもの。

1974年生まれの西川美和監督が、『ゆれる』の原案・脚本を書いたのは、第1

作目『蛇イチゴ』（02年）に続いて、自分が実際に見た夢を出発点にしたというからすごい。というより、30歳くらいの女性が、なぜそんな兄弟の確執の夢を見るのか不思議に思えるとともに、恐ろしく思えてくる。『エデンの東』は、最後には主人公のキヤルは愛する女性アブラの支えもあり、父親の許しを得て心の安らぎを得る形で、収まるところに収まっている。それに対し、西川美和の脚本は、キーパーソンとなる川端智恵子（真木よう子）をさっさと吊り橋から落して（落ちて）死亡させてしまううえ、事件の真相は観客の解釈に任せるという手法をとっている。しかも、7年後、兄の早川稔（香川照之）が出所した後も兄弟の絆は回復せず、まさに「ゆれる」ままに置いている。

あの小柄でかわいい表情をした西川美和監督の心の奥底に、こんな恐ろしい想像力が潜んでいたわけだが、それが、こんな形で徹底的に吐き出され、見事な構成・演出で表現されることによって、やっと理解できるわけだ。キネマ旬報ベストテンの脚本賞を受賞した西川美和は、インタビューで、「私はオリジナルで映画を作っていきたいです。それをやらなければ、自分が映画をやる意味はないですね」と答えている（『キネマ旬報』2月下旬決算特別号171頁参照）のを見ると、さらに期待が膨らもうというもの。彼女には、今後も西川美和流のオリジナルな脚本や映画をつくってもらうため、いろいろと怖い体験をしてもらいたいものだ……。

この映画の一級品性は……？

この映画が一級品であることは、2006年7月の公開時から評判になっていたが、半年後の今、朝日ベストテン1位という評価が固まり、またキネマ旬報ベストテンや個人賞での評価をもとに言うわけではないが、あらためてその一級品性がどこにあるのかを確認しておきたい。その第1は、全体の構成力と綿密に練り上げられた脚本にある。第2は、主人公の早川猛（オダギリジョー）と稔、そして智恵子の心の動きをどこまでも冷徹かつ客観的に描き出すのに不可欠な、観察力・洞察力の鋭さ。そして第3は、助演男優賞を受賞した香川照之をはじめとした俳優陣の演技力。この3点の一級品性については、『ゆれる』について書いているどの評論にも詳しく書かれているはずだから、私はこれ以上書かないが、誰が見てもそう思えたからこそ、これが朝日ベストテン第1位に選ばれたわけだ。

2人兄弟それぞれの選択は……？

『坂の上の雲』における秋山好古と真之兄弟それぞれの選択や、昭和を代表する石原慎太郎と裕次郎兄弟それぞれの選択をはじめ、2人兄弟それぞれの選択にはいろいろある。そして、その選択がそれぞれ自主性・独立性を持ち、互いにそれを認め合い、尊重し合うことができれば何の問題もない。しかし、1945年の敗戦後、家を中心とした家族制度を崩壊させたにもかかわらず、なお2人兄弟の一方が家を継ぐとか家を守るとかの選択を余儀なくされるケースも多い。そんな場合、2人兄弟の間にさまざまな確執が生まれることは容易に想像できる……。

その確執の核となる感情は、嫉妬と被害者感情。つまり、家に縛られ自由な道を歩めなくなったという被害者感情を持った者は、家を飛び出し自由に生きる他者に対して嫉妬するわけだ。そしてまた、その確執を深めるのは、自由な道を選択した者は縛られて生きる他者の気持を理解できないということ……。さらに、家に残った者には、否応なく父親や母親との愛情や確執がプラスされるし、兄弟共通のマドンナ(?)がいれば、その奪い合いという要素も介入してくる(?)から、兄弟間の確執はさらに複雑で深刻なものに……。

この映画では、早川兄弟の弟の猛は、すべてを割り切り自分が東京に出ていったことによってそんな確執はすべて断ち切ったものと思っていたが、母親の一周忌で故郷へ帰ってくると……。

男の狡さ vs. 女の狡さ……

『ゆれる』で、『エデンの東』における長い髪の美しい娘アブラの役を演ずる(?)のは、稔が経営するガソリンスタンドで働いている猛の幼なじみの智恵子。『東京フレンズ The Movie』(06年)で藤木涼子役を楽しく演じた真木よう子が、『ゆれる』では兄弟の人生に決定的影響を及ぼすような、えらく深刻な役柄を演じている。彼女の使い方においても脚本の冴えはすばらしく、①ガソリンスタンドで、たまたま帰郷してきた猛を見て、一瞬手を差し出そうとした時の智恵子、②3人で渓谷行き話をしている時の智恵子、③猛の車の中で、露骨に猛に誘われた時の智恵子、④智恵子のアパートの中で、猛とのセックスにのめり込む時の

智恵子、の表情を見事に切り取っている。また、翌日①渓谷で無邪気に川の水と戯れる稔を尻目に、猛に対して真剣に東京行きをねだる(?)智恵子、②吊り橋を渡る猛を見て、なぜか私も行ってみようと言う智恵子、③危ないから気をつけてと言いつつ、智恵子の後ろをついてくる稔からいきなり離れる智恵子、そして④真相は結局わからないわけだが、稔との揉み合い(?)の中、吊り橋から川に転落してしまう智恵子、という女としてのしたたかさや狡さを脚本は真木よう子に見事に表現させている。

この映画では、実家のことはすべて兄まかせとして1人東京へ出ていき、カメラマンとして成功を収め、母親の一周忌で久しぶりに故郷へ帰ってきたその日に、兄と親しげに話している智恵子を見て、その智恵子をいとも簡単に奪ってしまう猛の狡さが大問題であることはすべての観客に明らかだが、実は被害者となった智恵子も、女の狡さをしっかり持った生身の人間……?

やはり身内の裁判は受けない方が……

早川家では、稔と猛との兄弟の確執も相当なものだが、その父親である勇(伊武雅刀)と勇の兄、早川修(蟹江敬三)との兄弟の確執も相当なよう……? 稔と猛の関係では、猛が東京に出ていき、兄が故郷へ残ったが、勇と修の関係では、兄の修が東京へ出て行き、弟の勇が故郷に残ったようだ。もっとも、修は東京で弁護士事務所を開いているのだから、それなりに成功しているわけで、親の遺産分割ではすべて弟の勇に与えているような雰囲気……?

それはともかく、稔が殺人事件で逮捕・起訴されて刑事裁判となり、弁護士が必要となれば、やはり普段はつき合いを断っている、身内の弁護士に依頼することになるのは自然な流れ。そこで猛がおじさんにあたる修弁護士に稔の弁護を依頼することになったのだが、ここで私が指摘しておきたいのは、弁護士は一般的に身内の事件は担当しない方がいいという原則があるということ……。

法廷モノとしても一級品

最近の法廷モノとして1番よくできていたのは『それでもボクはやってない』(06年)。また、一面そんなバカなと思いつつ、女性検事の女としての心の動きの

表現という意味で興味深かったのが『愛ルケ』（06年）の法廷シーン……。

この2つと対比しても、『ゆれる』の法廷シーンは一級品。稔の刑事裁判は、現在ホリエモン裁判などで一部実施されている「集中審理方式」ではなく、従来どおりの「五月雨方式」で、映画では第1回公判から第4回公判までが丁寧に描かれる。以下、その中でこれは一級品と思えるところをいくつか指摘したい。

これは一級品 その1 稔（被告人）の対応

『ゆれる』の法廷シーンで、香川照之が見せる芸達者ぶりは見事なもの。第1に、第1回公判における起訴状への認否において、とつとつとしゃべりながら、結局無罪だと主張している理屈は絶妙。第2に、第2回公判の被告人質問における、智恵子がなぜ吊り橋から落ちたのか、またその瞬間、稔がいかに最大限の努力をしたかの供述も見事。第3に、第3回公判の被告人質問において、智恵子の遺体から微量の精液が検出されたこと、それが死亡前日のものであるが、それが稔のものではないことを指摘しながらの、検察官の質問に対する稔の供述とパフォーマンスは実にお見事！

この第3点については後述するが、これらを観ていると、香川照之の芸達者ぶりとは別に、西川監督が法廷での尋問のあり方をよほど勉強して脚本づくりをしたことが明らかになるはず。

もっとも、あえて1つだけ弁護士としての疑問を提示すれば、智恵子の遺体から精液が検出された云々の証拠は、被告人質問の前に既に検察側から書証として提出され、弁護人はそれを所持しているはずだから、本当はそれについて、被告人はもとより毎回傍聴席で傍聴している猛も、それに関する質問への供述はあらかじめ打ち合わせしているはず。したがって、本当はその質問を聞き、スクリーン上にさっと緊張感が走るということはあるえないのだが、映画としては断然この方がステキ……。

これは一級品 その2 実に面白い弁護人のパフォーマンス

当初、身内の刑事事件にあまり乗り気でなかった修弁護士だったが、猛が多額の現金を見せつけたことによってやる気になったよう……。そんな動機はともか

く、修弁護士が自ら現場を確認したり、被告人や猛と綿密な打ち合わせをしたのは当然だが、面白いのは彼の被告人質問のスタイル。つまり被告人質問において修弁護士は、智恵子が吊り橋から落ちるリアルさを裁判官に理解してもらうべく、自ら弁護人席の机の上にお尻を下ろして乗っかりながら質問したり、後ずさりしている中、突然その机の上から転落するという行動を見せてまで頑張っていること。まあ、実際にはありえないことだが、映画の法廷シーンとしては、実に絵になる面白いもの……。

これは一級品 その3 被告人のパフォーマンスにより無罪を確信！

殺人罪で起訴された事件が無罪になれば、それは弁護士としてはすごい勲章。当初、全く自信のないまま稔の弁護人をつとめてきた修弁護士だったが、第3回公判では、智恵子に、肉体関係を持つような恋人がいたことをはじめて知った稔が、傍聴席を振り向きその「恋人」に対して、深々と頭を下げたお詫びをするという思いもかけないパフォーマンスを見ることに……。

これによって、稔の無罪を確信した修弁護士は意気揚々。その日、稔と修弁護士そしてガソリンスタンドの従業員たちは稔の無罪を確信して祝杯をあげたが、その中でただ1人黙り込んでいたのが猛。なぜならそれは、稔の法廷での供述は、すべて猛が目撃した姿と違っていただけ……？ しかもあの、「恋人」に対する謝罪のパフォーマンスは一体ナニ……？ ひょっとして、兄貴はすべてを知っているのでは……？

これは一級品 その4 ハイライトは猛の背信的証言

この映画の法廷シーンのハイライトは、第4回公判における猛の証言。なぜなら、打ち合わせと全く違う猛の証言によって、修弁護士のそれまでの苦労がぶち壊しになってしまうから……。主尋問はほぼ事前の打ち合わせどおりに進むのが普通だから、弁護人としては突然証人が打ち合わせと正反対の証言を始めれば、戸惑うのが当然。猛が証言し始めたのは、「兄は、あんな巧妙な嘘をつく人間じゃなかったんです」ということ。そして、「ぐらぐら揺れる橋の上で二人はもみ合って、彼女は、兄に突き落とされました」と証言したから大変……。

それを聞いた修弁護士は直ちに尋問を終わらせようとしたが、そこで食いついてきたのは、さすがプロの裁判官（田口トモロヲ）。怒り狂う弁護人を制しつつ、裁判官が「証人は何が嘘なのか説明して下さい」と猛の証言をさらに促したから、もう最悪……。やはり、なまじっか身内の刑事裁判の弁護士なんか、引き受けるものではない……？

7年後の心にくい演出は……？

『それでもボクはやってない』は、裁判員制度の実施を2年後に控えた今、こんなにも危うい刑事裁判の実態を広く国民に知らしめたいという周防正行監督の思いが伝わる映画づくりとなっていたが、『ゆれる』はそのタイトルどおり、最後までゆれ通しで、1つの価値観や結論を示さないところがミソ……？ したがって、法廷シーンも第4回公判でおしまいとなり、論告・求刑、弁論そして判決言渡しシーンは全くなし。ここにも西川脚本の冴えが……。

そして7年後。猛は相変わらず写真家として忙しい生活を送っていたが、突然そんな猛宅を訪れてきたのが、ガソリンスタンドで働いていた岡島洋平（新井浩文）。彼は明日が稔の出所の日だということを告げに来たのだった。そんな洋平に対する猛の答えは、「自分は迎えに行けない」というつれないもの……。それに対して洋平は、あの時「自分の兄貴をとり戻すため」と証言したじゃないですかと詰め寄るが、さて猛は……？

ここで意味を持つてくるのが、先に伏線として仕込んでおいた8mmの映写機。これは母親の一周忌の時に形見分けとして猛に渡されたものだった。洋平の言葉を聞き、1人「溪谷の思い出」と題された8mmフィルムを観た猛の目に映ったのは、幼い弟の手をしっかりと支えようとする兄稔の姿だった。それを観た猛は何を思い、どんな行動に出るのだろうか……。まさか、これから出所する稔を洋平と共に出迎え、過去のすべてを水に流してハッピーエンド、そんなバカげた結論にならないことだけはたしかだが、7年後の「ゆれ」をキネマ旬報脚本賞の西川脚本は、どのように描いているのだろうか……。それをじっくり確認しながら、朝日ベストテン第1位作品のすばらしさを堪能しよう。

2007(平成19)年2月6日記